

中学校現場からの報告

「競争」という世界に 生きる 中学生

—学力テスト体制下の中学校—

小林 朗

「またテスト？もう嫌だ」「このテストは成績に入る？」「テストできないから寝ていい」と全国学力テストやNRTテストの前日になると生徒たちの声が聞こえて来る。

テストを監督する教員も中学生をテスト漬けにしていることに疑問を持っている。しかし、職員室ではあまりテストを話題にしない。

NRTテストの結果を中学校の場合、必ず各教科で分析することになっている。教員一人ひとりは学力テストがおかしいと心中では思っているも学校全体の空気はいかに全国学力テストやNRTテストの数値を一点でも上げるかになっている。

一 過去問をやることは至上命令

新潟市の小中学校では全国学力テストの過去問（過去の問題）を事前に実施する学校が多くなってきた。

新潟市で全国学力テストの過去問を各学校で行うようになったのは教育委員会の学校支援課に配置されている地区指導主事（退職校長）の校長への助言も拍車になった。

新潟市長も全国学力テストの数値を上げてもらいた

いと述べた。大阪の橋下市長のように全国の首長も学力テストを上げることが主張している。新潟市議会での全国学力テストの数値を上げることが議員の質問になった。

一連の学校への圧力は学力テストの数値を上げることと「学力向上」と呼び、嵐になって襲ってきた。

全国学力テストやNRTテストの数値を上げるために過去問を各学校で実施することが当然になったのである。「学力向上」がテストの数値上昇という狭義に捉えられた。

新潟市教育委員会は全国学力テストを学校の学力課題を設定するバロメーターにするように主張している。そのため、民主党政権下の抽出実施でも全小中学校を悉皆で行っていた。採点業務は各学校にまかせず、業者にさせていた。

自民党政権になって、学力テストは悉皆実施になった。イギリスの学力テストでもテストの実施、採点業務など必ず業者との癒着が関係してくる。日本も例外ではないだろう。この視角での批判はなかなか日本には見られない。

各学校では全国学力テストより、NRTテストの結

果を分析し、その年の学力課題を追求している。このテストは筑波大学関係者が作成している。毎年、問題の変化があまりないため、過去問を実施すれば数値を上げることができる。各学校はNRTテストを毎年の学力のバロメーターとしている傾向が大きい。

二 Webテストもある

新潟市教育委員会では全国学力テストの結果、算数・数学の「学力」が問題だとし、年8回のWebテスト、クラウド（インターネットをベースにしたコンピューターの利用形態）を行っている。理科の全国学力テストの実施に伴い、年4回の理科のWebテストも二年生で始めた。

本校は県教育委員会が実施している国語・英語のクラウドも年10回しているために、二年生だけみると、32回のWebテストを朝学習で行っている。

教育委員会はWebテストを実施するかどうかは学校の判断でよいとしている。しかし、新潟市の学校では職員会議でこのことについて話し合いをしたことを聞いたことはない。小中学校校長会で実施することを決めているのでトップダウンで各学校に行うことを強

制している。

そもそも生徒はこのテストの意味が何かわかっていない。朝学習でテストをやっているだけだと思っっている。テストばかりどうしてやるのか生徒は知らない。

月初めにテストを実施し、採点后、クラウドに入力する。入力期限があるために教師は忙しくなる。教師自身もこのテストの意義をあまりわかっていない。市内の数学の教師は自分たちで小テストを行っているので、Webテストは必要ないと言っている教師もいる。

Webテストは市議会対策でもある。全国学力テスト対策に何を教育委員会では施策としているのか市会議員に質問された場合、「Webテストを実施していただきます」と答弁できるからである。

「学力向上」は子どもを度外視して行われている面もある。クラウドで同一テストを全国で実施できれば、全国学力テストをしなくても全小中学校の「学力」はわかることになる。

三 学力テスト体制に巻き込まれる教員

「競争」をあおる学力テスト体制になぜ教員が巻き

込まれていくのかは現在の最大の教育問題である。

数学・英語の習熟度別学習にすると、できないクラスの子供たちは全く学習意欲がないために教員が授業成立させるのに困難が付きまとう。全国的に習熟度別学習がうまくいかなかった大きな要因である。

教員は習熟度別学習のような方法には違和感を持っているが、どの生徒にも「学力」をつけたいと強く思っている。中学校の場合、非行問題などをおこしやすいのはいわゆる「低学力」といわれている生徒たちであると確信を深めている。少しでも小学校で積み残してきた算数の分数などをできるようにさせたい、英語のアルファベットを書けるようにさせたいと考えている。教師本来の仕事は授業であり、中学生に「基礎的な学力」を身につけさせたい気持ちは自然なことであることは間違いない。

中学校卒業後、高校入試があることも大きい。数学の大問の一番の計算問題を解かせたい、社会科で7都道府県は位置がわかるようにしたい、英語のbe動詞は理解させたいと各教科の教師は思っている。中学生に「基礎的な学力」をつけていないと高校入試が大変だと教師は痛感している。

ここに現在の学力テスト体制を無意識に支えてしま
う教師の意識の基盤があるといえる。もちろん、教師
は中学生の「学力」をつけたいという善意からである。
NRTテストで今年の生徒はこの問題も解けなかつ
たと思うと教師は悲嘆にくれる。このテストの数値で
教師が「学力」のパロメーターにしている面がある。
そのために自然と中学教師はNRTテストの結果に執
着する。

「学力向上」と言われると教師がどうしても従わな
くてはいけない状況が学校現場には存在するのである。

四 授業からみた中学校

NRTテストの結果分析を普段の授業にいかされて
いるのかは甚だ疑問である。授業は教師にとつて個別
的な空間である。誤解を恐れず言えば、授業は教師の
職人的な仕事といえる。もちろん、自分以外の多くの
授業に影響を受けながら、その職人技を鍛えていく。

昨今、ユニバーサルデザインで授業を実践しようと
いう動きが全国の教育委員会にある。これは全国学力
テストやNRTテストに呼応したもので、子どもたち
にテストで数値を上げるためにドリル的な授業がはび

こり、過去問やWebテストが流行するのである。

中学校が人間らしく生きる場をつくること、社会人
として生きる力を育てることが教師の仕事といえる。
学力テスト体制は中学生に「競争」を強制するが、教
師は少しの「競争」は仕方がないと考えているかも知
れない。教師自身の体験で、少なからずの「競争」に
勝利してきたからである。しかし、現在の学力テスト
は中学生を人間らしく育てる場とはならない。

ここで大切なことは、教師は教育の専門家ではある
が、その限界を認識しているかどうか大きな問題であ
る。教師がすべての教育を担うという錯覚を捨てるこ
とが重要といえる。学力テストによって、こんな教育
ができるというのは「教育」の恐ろしさかも知れない。

「こんな教育を行ったら、こんな学力がうちの中学
生につきます」といった約束をすること自体、異常な
世界なのである。教師自身が中学生を尊重していく教
育を行うことは何回もテストをすることではない。や
はり普段の学校で教師ができることとできないことを
教育の営みの中でわかることも知れない。

学力をつけるためには、教師は毎日、展開している
授業を地道に取り組むしかないだろう。授業そのもの

を教師自身が問うことから始めるしかない。現在、目の前にいる中学生の実態から授業を構想するのである。教科ごとにどのような学力を定着させるのか授業のねらいを明確にし、中学生を揺さぶる教材によって導いていく必要がある。

ある生徒は授業の感想ノートに「生徒に望むことは何ですか。卒業したときに何を得てほしいですか」と書いている。この声は中学生が教師に本当の学力とは何かを求めているのである。

(こばやし あきら・中学校教員)

子どもの声

新潟市の〇〇中学校三年生に、テストについて意見を書いてもらいました。意見表明権(子ども権利条約)の一つの表れになればと願って。名前は仮名です。ご協力くださった先生に感謝します。

(編集部)

webテストについて

中3 佐藤 公成

webテストは、朝読書の時間に行うがそれはどうか?という意見があった。勉強に対して意欲がない人でも、読書なら意欲的に、中には勉強になることが書いてある。実際、私の友達は「テストするなら読書したい」と言っていた。うちのクラスでは、テストの解
答用紙をくしゃくしゃにし、それを投げ合ったりしています。これでは紙の無駄なうえ、ほかの人に当たるのではもう言いようがない。

ただ、私たち三年生はまもなく受験を迎える。日々の積み重ねを考えると、webテストは私たちに害を与えているだけではない。私の個人の意見は、問題もいいし、文章問題も基本に忠実だと思った。少なくとも、テストは朝読書より勉強になるだろう。しかし、やらないのでは意味がない。大半はやっているのだがやっていない人もいる。どうやら朝読書の方が効果的